

絵本カフェ育児

かじくんと
ゆかいな毎日



八木橋 未奈

かじくんとゆかいな「まえがき」

2008年6月。

福井県福井市のとある病院の分娩台で、かじくんは生まれて初めての声を上げました。

私たちは転勤族で、福井に越してきて1年で、まだ20代で、それはそれは世間知らずで。

でも、かじくんは生まれてきてくれました。

「すっごくすっごくせまくって、すっごくすっごくくるしいところを、がんばってとおってきたんだからね！」

そう話してくれたかじくんは6歳で、とても迷惑そうで、まるで生まれてきたくなかったような雰囲気でしたけど。

でも、とにかく彼は私たちのところにやってきたんです。

私はお母さんとしてその迷惑そうな話を聞きながら、

「こっちの方こそ苦しかったし！」

という言葉をぐっと飲み込んで、

「そうなんだ、がんばって生まれてきたんだね」

と答えてあげました。

かじくんはとても満足そうに、

「そうそう。かじくんがんばったんだよ」

そんな彼ももう9歳。今では私のことを「命の恩人様」と呼びます。
「赤ちゃんを産むときって死んじゃうこともあるでしょ？」
たーたい（私のことです）は命がけでかじくんを産んでくれたんだよね？
たーたいがいたからかじくんは生きてるってことだから、
ということはたーたいは……」
まあ彼の話はとても長いのでこれぐらいにして（笑）。
あのとき飲み込んだ「こっちの方こそ苦しかったし！」が少しでも伝わってるみたいでよかったです。

今のやり取りでもしかしたら気づいた方もいるかもしれませんが、
「変わってるよね？」「おもしろい！」「変……」と言われたり言われなかったり言われたり。
ほめ言葉と受け取っていますが（笑）。

つまりこれは、ちょっと変わってるらしい男の子と、どうやら少しだけ普通と違うらしい私との日常を紡いだおはなし。

私がこれを書いている今、あったかいお布団で眠っているであろう男前と、
ドーナツ屋さんのカウンターでシナモンの効いたドーナツをほお張っている母のおはなし。

運命共同体のようで、別々の人生を歩んでいる、親子の物語なのです。

願わくば立派な大人になるであろう彼が、この本を手にしたとき、ちょっとでもいいから笑ってくれますように。

愛されていたことが、母が自分との時間を楽しんでいたことが、少しでも伝わりますように。

おいしいドーナツとコーヒーのように、彼の人生の一時にそっと寄り添いますように。

読んでくださっている方にも、少しでも寄り添えたらいいな。

子育てをする楽しさを、子どもの奥深いおもしろさを、ほんの少しでも味わっていただけたらなと思います。

お手に取ってくださってありがとうございます。

それでは、かじくんと私の物語、スタートです。